回りて向かう～供養のあれこれ～

● 法事のマナー

学校では教えてもらえず、大人になり社会で揉まれてゆく中で、人が自然と学んでゆくもの、それが冠婚葬祭に関する様々なしきたりやマナーではないでしょうか。

しかし、それらは地域の風習やその場に関与する宗派の違いによって、同じ事柄の意味が１８０度変わることもあります。結婚式などの慶事に於いては、少々の行き違いがあったとしても、笑って済まされることになるかと思いますが、逆に忌み事に於いては、場を気まずい雰囲気にしてしまうこともありそうです。

僧侶の立場として、よく質問を受けるのが、のし袋の水引の色についてです。色は大きく分けて赤白、黒白（銀白）、黄白とあります。例えば皆さんが参加者として、葬儀で用いるのは黒白（銀白）は当たり前のことですが、四十九日は黄白か黒白、どちらでお家の方に渡したらよいのか、と結構悩まれると思います。その答えは・・・実はどちらでも良いということになります。

この問題は四十九日というものをどう捉えるかによって二つに分かれます。四十九日法要は別名、満中陰とも呼ばれ中陰（チュウイン）（亡くなられた方の存在は肉体でもないし、まだ成仏もしていない状態）の期間が無事満ちたことを、ホッと安堵しこれからは亡き方へ善業を向ける供養なのだとして、赤と黒の中間として黄白を用いる考えかた。もう一つは、この法要を済ますまではとにかく喪中であり、法要が始まる前に祭壇にお供えするのだから黒白が適切であるという考えかた。

さて今度は、僧侶にお布施として渡す場合の色の違い。これは特に葬儀の場面でのことかと思いますが、赤白なのか黒白なのかという疑問があります。全国的に見ると、この場合は本来水引自体が不要であるとする考え方や、僧侶にも黒白を使うのが本当であるとする地域もありますが、高知県においては黄白か赤白が多いと感じます。

葬儀でのお布施に赤白の水引を用いることに、かなり抵抗を感じる方が多いと思いますが、これは『戒名料としてのお布施』という考え方が浸透したものだと思われます。戒名を授かったことで、確かに仏さんと御縁が結ばれて、無事に成仏が約束されたという慶びと解釈することができます。ちなみに生前に戒名を受ける得度式は、仏教界に於いて大変慶事であると認識されています。

以上のような地域の状況を踏まえていただき、参考としてもらえればと思います。私個人としては、葬儀で頂くお布施の水引は黄白が望ましいかな・・・、と思いますが皆様の判断にお任せしております。

● 精進料理とは

精進とは、サンスクリット語のヴィリヤーを漢語に意訳したもので、ほぼ日本語の努力と同じ意味になります。つまり単純に置き換えると努力料理と言えますが、なぜ努力料理を故人様が召し上がるのか？、それは「故人様も成仏して諸仏の御仲間になっているけど、より多くの様々な仏さんに出会うために未だ修行の旅を続けているよ。」という観念に基いています。

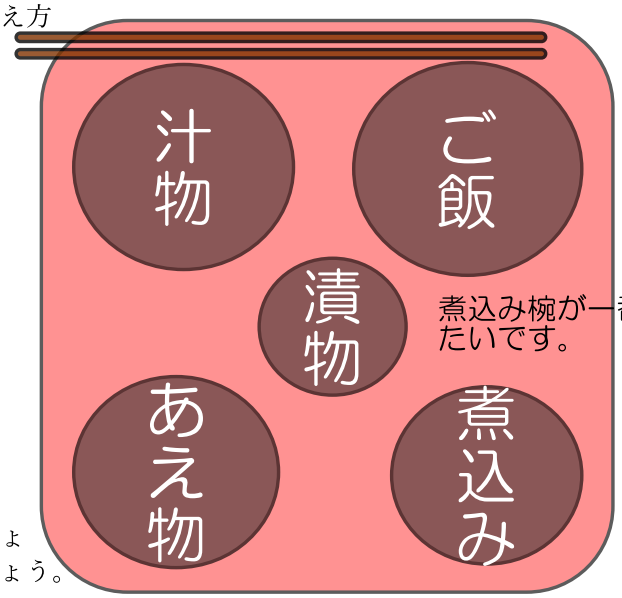
つまり精進料理とは修行者の食べ物なのです。修行とは厳しいことをするのではなく、結果的に厳しくなるものなのです。では何をするから厳しくなるのか？それは自分自身の存在を徹底的に見つめ直すからなのです。

私たち人間は、物理的に存在するためには食物と水分を必要とします。これらは体外から摂取しなければならず、そのために何かを捕食しなければなりません。精進料理とは何も動物と魚を使わなければ良い、というのではなく、本来は植物だって殺したくないのです。しかし、「人間は何かを殺さなければ生きていけない。それならば、最低限の殺生でこの身の建康を保っていこう。」という実践的な考え方が仏教精神の根本にあります。

無殺生を極端に突き詰めれば、インフルエンザのワクチンの製造過程では鶏卵が利用されていますし、家畜の髄液から作られるゼラチンは家屋のフローリングや化粧品の成分の一部に利用されています。自らの生活の周囲に常に目くじらを尖らせながら生きるのも個人の自由ですが、お釈迦様はあまりの極端を戒めました。

現代は飽食時代となって久しいですが、食べ物への感謝は薄れてきているように感じます。日本語の『いただきます』は神様仏様に対しての感謝ではなく、料理するために殺された動物植物への感謝をあらわしています。欧米人からしばしば無宗教と言われる日本人ですが、一日三度、無意識に仏教的になる瞬間が日本人にもちゃんとあるのです。

もし、どうしても故人様に肉魚をお供えしたい場合は別皿に入れて、その気遣いの気持ちだけ召し上がってもらいましょう。そして、お下がりとして美味しく残さず食べてあげましょう。



故人様 ↑

↓ 皆様